

センター つづき

NO.82



ひと と 言

出合いが人をつくる

村上 智志 (センター運営委員)

私の教員としてのスタートは県立盲学校(現視覚支援学校)。それから38回目の4月を迎えます。その春出会ったA君は、視覚障害と知的障害を抱えていました。10歳になつての初めての登校。お母さんから離れる時に泣き、私の腕の中で泣き、なかなかコミュニケーションのとれない毎日が続きました。

目が見えず、言葉を発することのできない彼は、表情や行動で自分の感情を表現していました。「コミュニケーションは言葉だけではないよ」「ぼくをよく見てよ」「じっくり待ってよ」そんなことを私に言っていると感じるようになってきた。数カ月、少しずつ彼の行動の意味が理解できるようになりました。

そして、私のまわりには、私の悩みを受け止めてくれる、すてきな先生方がいました。

A君は今年46歳になります。小学部卒業後、1年に1回は必ず会うことになりました。「先生のこと、わかるんですよ」とお母さん。彼に出会っていなければ教員としての今の私はありません。彼からたくさん学ぶ、そのことが私を支えています。

4月、たくさんのお出合いがあります。「出合いが人をつくる。」そう思います。

すてきな出合いを。

目次

ひと言	村上 智志	1
特集 座談会・やりがいのある教師の仕事	千坂 朋広 早坂百合恵 佐久間千枝 大坂 亜希	2
2016年 新春講演会(要旨)	生きものとしての人間から、自然と科学を問う	
新春講演会 参加者感想	中村 桂子	12
おすすめBOOK	川端 英子	17
子どもと学校	新しい春を迎える前に思うこと	
教育時評	《子ども》の年齢と法律	
わたしの出会った先生 13	薫陶を受けし塾生より	
相談センター2年目の雑感	花島 伸行	20
おすすめ映画	金谷 光子	22
センターの動き	宮原 淳子	24
	センターの動き	24

やりがいのある教師の仕事

新学期が始まる。仙台在住の作家・佐伯一麦は、この季節のことを「クラス替えが行われた校庭で整列が解けた後、見知らぬ新しい級友たちを眺め渡して、誰に声をかけてみようかと迷う一瞬。そんな期待と緊張とが混じった若葉の頃の思い出……担任がどんな先生になるかも気がかりの一つだった」と書いている。子どものみならず、教師も、今年こそはと、夢をふくらませる時期である。しかし今、学校はさまざまな課題であふれているように思える。最大の課題は、教育の一番大切なところが見えなくなっていることかも知れない。その要因として、教師の意欲を妨げる何かが働いているのも確かだろう。今回は4名の教師に今の思いを語り合ってもらい、今の学校現場の状況を共有し、これからの教育を共に考える機会になつて欲しいと願っている。(菅井)

出席者 千坂 朋広さん (中学校教師)

早坂百合恵さん (小学校教師)

佐久間千枝さん (小学校教師)

大坂 亜希さん (小学校教師)

司会 菅井 仁・佐々木久美

なとか、そのへんの話してもらえますか。



大坂 今、ちょうど卒業文集を子どもたちが書いてたんで、

自分のことを思い出した時に、小学校の卒業式で一言話すコーナーがあつて、「子どもに慕われる先生になりたいです」みたいなことを言つてたんですよ。その時の教師のイメージは、子どもとかかわる仕事とか授業くらい

司会 最初にそれぞれの「夢と現実」から話してもらえますか？
 こういうことをしたいとか、学校つてこうだよなつて、なんらかの夢を描いて教職の道を選択してきたと思いません。これまでの教師生活の中で、でも現実はどうだった

しかないんですけど、なんとなくこの仕事があつてんじゃないかみたいにして。子どもとのかかわりがおつきいなというイメージで。でも、いざ働くと子どもとのかかわりがメインの授業の裏にこんな仕事がいっぱい？ それで、あれ？ みたいな。ほんとにやりたいことになかなかたど

■夢と現実のはざままで

り着けない。年齢も重ねると裏方の仕事も増えてきたりして、なかなかメインの方に力を注ぎたくない自分っていうのを毎年感じます。教材研究が一番最後、クラスのことが一番最後みたいな。ちよつと本末転倒になってきてるなっていうのが今の現実です。

佐久間 私はやっぱり出会った先生のイメージというのが



あって。最初に先生になりたいと思ってたのは中学校の時です。本当に体育が苦手だったんですよ。体育の跳び箱が跳べなくて跳べなくて。もう無理っていうふうになってた時に、先生が、もういいよって言わないで、最後まで

付き合ってくれたんです。女の先生だったんだけど、一緒にできたことを喜び合える存在がいるっていうふうな感じが思ってた。なんか、そういう人に私もなりたいたい。思ってたのがきっかけなんです。こんないい出会いができる仕事ってほんとにいいなって、これはなるしかないって思ってたんですよね。

実際になってみると、こつちが要求しすぎると子どもはきつんだなっていうのを、最近感じるようになってきた。ガチガチやろうとしても頑張れない子が結構多いから、どうしようみたいな。まあ、いいかって諦めることが多い。あとは子どもとの関係だけじゃなくて、子どもの抱えてるものとか、子どものバックグラウンドとかもいろいろ考えていく必要があるなと思ったりしましたね。家族の関係はどうだとか、明るい世界だけじゃないんだなっていうのも見えてきたりする。

千坂 俺も出会った先生はいい先生がすごく多くて、教える



こともなんとなく好きだったし、なりたくなって思った。でも教員になってみて分かるのは、職員間の関係でもそうだし、クラスが増えれば増えるほど他のクラスとの足並みをうんぬんとかって、子どもの前に職員間でどうす

るかみたいなのがあったりして、自分が思ってることと違うこともあって、そのへんがやっぱり現実はちよつと違うかなと思うね。また最近思うのは、教師の力だけではどうにもならない現実が子どもの世界にはあるなって感じる。親との関係が根深いから、なかなか教師の親身なかわりだけでは変わりきれない。貧困の問題とか、それにかかわる進路の問題とか。教員が親身になってかわるだけでは足りなくて、どこかに支援を求めるとか、生育歴まで含めてもう一回出会い直すためにどうするかを考えるようになってきた。若い頃出会った先生もそういうことを感じながらいろいろやってたのかなって思うのが、なんとなく年食って分かってきたっていう感じはありますね。

早坂 親との関係が根深い？ 中学校になると、むしろ親になんかしゃべらなくなる感じがしますけど。親と疎遠になつていくのかって思うけど、そうでもないんだ？

千坂 疎遠と根深いは違うっていうか。俺は愛されてこなかったとか、俺はいなくてもいいんだとか、いなくてもいいんだからどうなつてもいいんだとか。だから、勉強する必要がないとか。でもそういうことをしゃべりだした生徒に出会えた時はうれしいなって思う。でも当然、答えなんか出ないし、なんにもできないのかという無力さと、少しは力になれるのかなみたいなのを感じるね。子どもはきつと

聞いてもらおうだけで少しは救われるんでしょね。信用して話し出すんでしょから。まあ、聞いて救われるような先生になれるように頑張るしかないなと思っていきます。



早坂 この年齢とか立場とかになってでしょうけど、今は苦しいけど楽しいってやつと思えるようになってきた。子どもとのやり取りもつかめてきたり、学校の中でも自分が動かすものも増えてきて、自分の行動や発言が以前よりも認められる年齢になつてきて面白くなつてきています。

みなさんの話を聞いて、そうだなあと思つたのは、家庭との問題もだけど、子どもだった頃と現在との社会背景の違いをすごく感じる。職場の中で50代の先生とおしゃべりすると、以前は良かったって。放課後、みんなで運動したとか、土曜日も出勤だったけれども、子どもを帰したあと、みんなで食事しながら授業や子どもの話をしたりして楽しかったってね。今の時代があとで楽しかったって思えるようになってきたら、もう怖いけど。今はどう考えても放課後の時間だったり、仕事が終わつたあとの時間を楽しいって感じられない。そういう心の余裕が持てないっていうのが現実だなと思いますね。

最近、良かったなつて思うのは、やっぱり自分が子育てを始めて、保護者との話を通じ合える感じは全然違う。自分にとっては子育てはプラスになつてると思っています。ただ、若い頃に良かったなと思うのは、無我夢中で突っ走れましょよ。自分のクラスのこと専念させてもらえた。

■若い先生の姿から

司会 今の若い人たちは、そうやって突っ走れるような雰囲気がないっていうこと？

佐久間 ないよね。なんか失敗しないんだよね。

早坂 ないよね。でも失敗しない。立派なの。自分のことはそつなくやるけど、学年のこととかみんなのことには、あまり自分から関わろうとしないかなあ。

佐久間 それは感じるね。たぶんうまくいかないこととか悩んでることとかあると思うんだけど絶対それ言わない。「これ、うまくいかないんですけど、どうしてるんですか」とか絶対言つてこなくて、こつちから、「どう？」とか聞いたりする。

司会 聞きたいけど、周りがみんな忙しそうにしてるから申し訳なくて聞けないっていう若い先生がいたよ。

早坂 印刷室とかで二人とかになるとボソツてしゃべり始めてたりするんだけど、肝心の同学年とかに相談できない。

千坂 俺はあんまりそうは思わないな。一般論として若者論っていつでもあるんだよね。その時々で、年上の人たちは若者を批判すんだよ。俺たちはこうだったみたいなの。それが正しいかどうかは別の問題としてあるけどね。だから、たぶん今の話もそうなんだろうなつて思うのね。

早坂 でも、批判なのかなあ？ 特徴だよな。

千坂 俺らもたぶん初任の頃はそうだったし、見えないことなんかいっぱいあったと思うのね。見えないけども無我夢中で突っ走る。失敗したくないとかつていうのはよく言えば「おりこうさん」なんだと思うよ。俺、若い頃の子ども

たちで印象に残る言葉つて、「先生、今日、放課後時間ある？」とか、「先生、今、忙しい？」つていう枕詞を使おうわけ。どういふことかと言うと、「時間ある？」が「話したいんだけど」の枕詞ばなんだよね。先生の状況を見るから、今日、話をしたいかなつて探りを入れ、確かめてから聞くわけでしょ？そして、その人たちが今は20代とかになつてゐる。だから、おりこうさんなんだと思うんだよね。それつて気づかないつていうよりも、そんな風になつてきちゃつたつていうか。

早坂 だからこそ問題だと思ふ。今、自分のやつてることが、どういふ人間を育てるかにすぐくかかわつてゐると思ふの。やつぱりその人たちは個人だけの問題じゃなくて、そういう中で育つてきた、そのような教育を受けてきたつていうのが大きいんじゃないかと思ふんですよね。

千坂 こんなこと言つたら、お母さんが忙しいのに迷惑かけるかなとか、先生にこんなこと言つたら、今、忙しいのに迷惑かけるかなとか。それぐらいのことかなと俺は思ふけど。だから自分たちの方から積極的に近づいていくしかなかなかつて思ふ。

■学びの場が必要

司会 みなさんは、さまざまピンチをこれまでに経験し、そこを乗り越えてきたわけだよね？ 乗り越える力となつたのは何だろう？ さつき大坂さんも、結局、自分の明日の授業の準備が一番最後になつちゃうと話してたけど。

大坂 そうなんです。やつぱり一日の流れを考えた時に、放課後の時間、真つ先に教材研究とはいかないですね。ま

ず会議もあるし。それこそいろいろ提出しなきゃいけない物を準備して。今の時期だと来年度の計画書とか練り直したりとか。

千坂 授業の準備する時間はまず日中にはないよね。放課後とか夜になつちゃうよね。だから日中に職員室にいる時間があつたほうが当然いいよね。

佐久間 私は何年間かやつてきてる中で、うまくいったつていう時のことを思い出す。それを支えに頑張つてますね。

私、今まであんまり「やつたー」とか「うまくいった！」つていうことがないんですけど。その中でも、ああこの学年良かったなとか、この一年間すごくよく過ごせたなつていう時つて、同じ学年を組んだ先生といつぱい話してるんですね。そういう時つて結構、子どもとの関係がうまくいつたりとかしてる。放課後に同じ学年の先生たちと廊下に出て、みんなの図工の掲示した作品を見ながら、これがああだよ、こうだよねとか。これ、どうやつてやつたの？

とか言いながら、すごい話してる。そうすると子どもともよく分かつて。ああ、昨日話に出たあの子が、これ描いたあの子かみたい。そういうふうなのが分かつて、なんかいいんですよね。

大坂 私は誰かに話すかな。(もう教室に行きたくない)みたいにも思ふこともあるんですけど、聞いてくださいよつて。それは職場内でもだし、同期の友人とかで集まつて。話し出せば、もう愚痴大会になつちゃうんですけどね。同じように思つてる友人がいると、そつちもそつちなの？ うちもこうでさみたいになつて、最後はなんかお互い頑張ろうねつて。

早坂 話を聞いてもらつし、聞いてあげる。聞くことによつて、

ああ同じだなんて感じるしね。あとは子どもかな？ 結局子どもたちに落ち込まされもするけど、子どもたちに救われるんだよね。

司会 やっぱり分からなかったら聞くというところかな？

僕が新任の時、先輩から隣り百姓になるといいと教えられたのね。初めて百姓をすることになった人が、いつ種をまいたらいいんだ？ とか、隣りの百姓が田んぼに水張ってる、じゃあ、俺も水を張んなきゃとか。これが隣り百姓だよと。だから日直つていう仕事、特に最後の戸締まり巡視は僕にはとても楽しい時間で、先生が教室に残つて仕事してる時はもうチャンス。とかく新任の頃とかはそうやってどんどんどんどん先輩に聞いてまわった。

先日、古川の先生と話す機会があったとき、彼の学校はここ6年間、校内研究は国語、算数、国語、算数、国語、算数の繰り返しで、その上3回とも同じ単元なんだそうです。自分が新任の頃は校内研修が音楽だとか、図工だとかつていっぱいあったけど、今の若い人はうちのような学校へ来たら、ほんとに学ぶ機会がないと話しました。

今は、国語、算数だけで、まさに学力テスト対応だね。そんな中で大坂さんは、大事な授業のことなどを聞いてまわってるわけでしょ？

早坂 大坂さんなんかよくやつてると思います。6年生1クラスで、隣り百姓もできないでしょ？ その上に特別活動もあつて。市教研の特活部会の中でも結構な役割を担つていて。そして組合の行事や会議にも来てるでしょ？

司会 大坂さんつて、やっぱりワーツとしゃべつて、そして若い……。そしてなんて言うのかな、柔軟なんだよね。

早坂 みんなの話をよく聞いているよね。柔らかいから。

司会 大変だなと思つても、ああ、こんなふうにするのかつて。やっぱりいろんな周りのアドバイスを素直に聞く耳とか、聞こうとする姿勢があるから。だから、みんながなんとかしなきゃって思っくんじゃないかなと思っよ。

大坂 ほんとに助けてもらつてますね。

司会 佐久間さんもその立ち振る舞いを見てると、宮城に来て2年目とは思えないね。

佐久間 宮城は勉強する場がいっぱいあっていいなというふうに思つてます。

司会 合同教研とかサークルとか、いろんな学習会に参加する。また組合の会議に出席するときも、会議が始まる前に話すことで元気をもらつたり。そういうことつて結構大事だよな。家と学校の行つたり来たりだけでは育たないところつてあると思うね。

佐久間 そうですね。私は体育同志会というサークルに参加してます。

早坂 体育があんなに苦手だつて言つてた人が？

佐久間 体育が苦手だから。教え方、分かんなくて。

千坂 学校と家の往復だけではやっぱり育たないつて思いますね。だから俺はサークルへ行くんだよね。

大坂 同僚の人とかに、いろいろ行つて偉いよねつて言われるんですけど。

佐久間 そうなのね。でも自分のために行つてんだよね。自分が分らないから。

早坂 それこそ最近思つのは、今、OJTつて言われているから、それをうまく利用すればいいんだなつて思う。市教委からすくくOJT、OJTつて言われているでしょう。

司会 OJTつて初めて聞くけどなんのこと？

千坂 職場研修。オン・ザ・ジョブ・トレーニングですよ。民間企業とかで新入社員が来たら、職場内で研修をして育てるっていう考え方。学校現場でそれをやりましょうっていうことなんだよね。それをうまく利用すればいいんだよ。早坂 そのOJTを押しつけられる感じで受け取るんじゃないかと、それを上手に利用して、職員同士のレクレーションなども取り入れて、楽しい時間にしてもいいんだなっていうのはすごく思ってます。

司会 やはりチーム学校と言うのであれば、そのよう場面も含めて、職員同士のコミュニケーションが大事ですね。

■みんなでつくる学校に

司会 今、保護者とのトラブルも含めて、保護者との連絡に自分の携帯や家の電話は使わない。必ず学校の教頭の前の電話を使うようになってるの？ もし保護者が仕事をしている方なら、仕事が終わってからの連絡になってしまう。そうすると教師は、それまで学校に残って学校から電話するという、徹底すればそういうことだよ。

早坂 うちの携帯からかけないほうがいいって。あなたのためにいいっていう感じで言われる。やっぱり今、携帯や自宅からかけて、そのあと、何度も何度も家に電話をかけてこられて大変だったって言うてる方もいたんですよ。だからたぶん職員のためにも言ってる部分があると思います。

司会 要するにそういう保護者とのトラブルというか、モンスターパーセントという言葉もあるくらいなんだけど、そういう問題というのは今、どの職場でも結構いっぱいあるの？

佐久間 ありますね。切り離せないです。

早坂 管理職が一番気にしてるのはそこですね。特に教頭先生は電話を受けてるからそうですね。そこで職員を守る立場に立ってくれるか、保護者の話にだけ耳を傾けてしまい、職員や子ども の声も聞かず、親と一緒にになって職員を叱る、そこが運命の分かれ道になる。今の校長は、厳しいところは厳しくするけど基本的に優しい。

佐久間 そのような管理職だと信頼関係が生まれませんよね。

早坂 今の学校は校長の下でみんな一緒に頑張ってる感じはすごくある。だから、学校もいいですよ。いじめがあった時も校長自ら全校児童900名以上を前に絵本の読み聞かせをしてくれました。管理職の在り方は大きいと思います。

佐久間 私は、その逆のすごい経験がある。職員会議とかで何かが決まったのに、鶴の一声でバーンって崩されたり、校長室に呼ばれて大きな声で怒鳴られたり、指刺されながら怒られたりとか。朝の打ち合わせでは誰かのバッシングみたいなことがあったりした。

早坂 職員室で休憩できないって言ってた人もいましたね。とても一息つけるような雰囲気じゃない。みんなが職員室に戻りたがらない。そしたら、もちろん会話もしないから、うまくいかないよね。職員同士がそうだったら子どもには



いい影響はないですよ。うちの校長先生は、職員会議はみんなで議論する場なんだから、みんなで話し合えたらいいけど、時間がないんだよなって言ってる。みんなで子どもをしゃべれるから楽しいんだよね。

千坂 結局、管理職の在り方が違うと学校全体が違うっていう話でしょ？ その一面はあると思うけど、それがすべてかなって思う。俺は初任地で、教務のS先生と一緒にいたんだけど、Sさんが言っていたのは、一番子どものことを見ていて知っているのは担任だし、管理職も子どもを育てる一緒にパートナーなんだから、そこは方法論とか違っても、議論しなくちゃいけないって言っていたわけ。Sさんは職員会議になる前に、もめそうなことか議論になりそうなものは、校長室で相前から話し合っていたんですね。今、こうだから、こうすつべ、ああすつべって。その過程で校長は理解するわけ。モデルは、やはりそこだと思ってるんだよね。そうしないと、結局そこに勤めてる数年間は暗黒の時代でしてみたみたいに終わっちゃうなって思うのよ。

早坂 分かりますよ。でも、そういう人が存在しない学校はそうなりがちですよ。

千坂 それをどのように手を取り合っていくかっていうか。早坂 いや、よく分かりますよ。私、やっぱりそこで大きいのは組合だと思ってる。職場では一人だとしても同じ思いを持って、子どものための学校でしよってやれる仲間がいて、やっぱり組合の力は大きいんですよ。

千坂 組合は教育委員会や校長と交渉することができる存在ではあるけど、大事なことは、職場で話し合っただけでなく、校づくりをしていくことじゃないかな。管理職だけでなく学年主任とも手を取り合わなかったら、それこそめちゃめ

ちゃになっちゃう。考え方が違うとか、方法論が違う人というのはいっぱいいるでしょう？ そのようなとき、どういうふうにお互いに折り合いをつけて合意していくか、ソフトラディングするようなことは時間かけてやんなきゃと思う。

たとえば、授業時数の問題でも、時数を削ってでもいいから、午前授業にして、校内研修のような、先生たちが困っていることが少しでもよくなるような時間を工夫して作れると思うのね。どうやって減らすかというと、35週で計算してるでしょ？ でも学校200日あったら週5日だったら40週やってる訳。40週で計算すれば1週間のコマ数はもっと減るよね。そしたら5時間の日つくれるでしょ？ そのところを学校内で世論形成すればできるんじゃないかなって思うんだけど。

司会 空き時間が欲しいという願いは、教頭や教務も授業を持って欲しいという形で組合などでも要求してきているよね。仙台が一番遅いんだけど、県南あたりから、もうどんどん広がってきてますね。何時間かでも持つてもらえれば、自分たちの空き時間ができて、教材研究や事務作業をしたりして、放課後、自由になる時間が増えてくる。子どもとの関係でも、放課後は会議だなんだって子どもたちとふれ合えないとなると、授業時間以外で子どもと話せるのは、いわゆる小学校だったら業間休みとか昼休み？ あとは朝？ 朝早く行って教室で待って、登校して来た子どもたちに次々話しかけるとかだよ。

早坂 うちでは若い体育主任の先生が頑張って放課後遊びを提案したの。どういふことかと言うと、去年までは校庭で鬼ごっこも禁止だったの。校庭が狭いので、怪我をするか

らだつて。信じらんないでしょう。だから、それをまず解禁したの。次には委員会がある日の放課後遊びはどうだろうという話になった。委員会の日は自分らも外にいたりしているわけだし、二人体制の委員会とかもあるから緊急時にも対応できるから委員会の日はいいんじゃないかということ、やっと外遊びをオッケーにしたんです。そうやって一つ一つ詰めてうちの学校なんかはやってきているんですよ。若い人が子どもに遊ばせたいと思って言うことは、たとえ一週間に一回だけでも貴重ですよ。

司会 その結果、先生たちもやっぱり出て遊んでる？

早坂 出て遊ぶ人もいるし、教室で子どもたちとおしゃべりしている先生もいる。でも、高学年なんかは先生と遊ぶより自分たちでドッジボールをしたいのかな。

千坂 それもある意味では管理なんだよ。俺らが子どもの頃は、放課後はいつでも校庭で遊んでも良かったでしょ？

なんでだめになったかと言うと、放課後に校庭で遊んでいると、学校の施設内だから怪我すると対応しなきゃいけない。そうなる困るから放課後は学校で遊ばせないで帰すんだよ。でも地域内に安全に遊べる場所なんてある？

全員 ない、ない、ない。

千坂 ないなら校庭で遊んでた方がいいわけじゃん？ その方が安全だよ。それでいながら体力が落ちたから強化しなきゃいけないとかって、朝とか業間に走らせるとかなんだとかやってるわけだよ。それこそ勝手に遊ばせとけば、体力なんて上がるって話じゃない？ 勝手に遊ばせといて、その時間を使って先生たちが他の仕事とかすればいいんだよ。その発想が全然ないんだよ。

それから、その他にも、仕事もデータになっているもの

はルーティンでいいものもあると思うんだよね。前年度を踏襲しながら、今年の子どもたちを見るとこの部分はちよつとハードルが高いから下げようとか、その逆に、ここは良さそうだからちよつと上げようとか、ちよつとだけ新しいのが入って、あとはもうルーティンでいいと思うんだよね。

その中で子どもと関わりながら一緒に成長できればいいのかなって思う。新しいことをやろうと思うと議論する時間もないよね。新しいことやって楽しいんじゃないかって、子どもが成長して楽しいと感じる。あいつ少し変わったんとか、子どもが満足して活動できて、俺たちの方も、ああ成長したなって見えてきて、喜びになればいい。

早坂 例えば、それは具体的にいうと、どういうことですか。

千坂 例えば、前年と同じ運動会の種目でも練習していく過程の中で、同じことやってるけど、今までトラブってた子が輪に入れたとか、練習する時間をどう工夫するかや、練習の仕方でも、クラスで練習する時に、やり方が分からないう担任に、こうするとうまくいくよみたいにアドバイスして先輩から若い人に伝えるとか。そういうのがあればいいんじゃないかなって思う。

早坂 結局、それって学校自体の変化が緩やかなときだからできることじゃないですか。今、英語が間もなく始まるとか、道徳が教科化するとか、大きな変化の中で揺さぶられてますよね。落ち着いて一年を過ごせないっていうのをすごく感じるんです。外国語と道徳のために今年は講習とかもあつたでしょ？ 私たちが揺さぶられてるのをすごく感じる。大きな変化の中にあるなって思うんですよ。

佐久間 今は過渡期にいるなって思いますね。どんどん新し

いこと入ってきますよね。えっ？ これもやるの？ って。

大坂 本当に次々来ますね。削らないで増えてくるだけ。

司会 今は新しい課題がどんどんどんどん入ってきて、ビルド、ビルド、ビルド。スクラップ・アンド・ビルドならまだいいのだけど。スクラップがなくビルド、ビルドの状態ですね。スクラップしてもいいものを、全部パーフェクトにやろうとするから、ますます大変になっていく。

佐久間 やれって言われると頑張っちゃうんだよね、先生たち、真面目だから。

大坂 うん。やんなきゃつてなりますよね。

司会 ビルドの元は文科省だけど、ビルドの出所は文科省だけど、政・財界など根深いところからの要求や思いが教育政策に反映してつくられてくるんだよね。だから、政策がおかしいとか、これって変じゃない？ と思っても、とても教師一人の力でそれに立ち向かっていくことはできないし、変えることもなかなかできないよね。でも、子どもたちは毎日学校に来て、勉強するわけだよね。一朝一夕で今の教育はよくならないかも知れないけど、やっぱり教師はそこであきらめないで、少しでも子どもたちにとって楽しい授業や学校をつくる努力をしなくてはいけないんじゃないかな。そういう仕事を通じて保護者や職場の先生たちとも協力していくことが、まずは大事なんだと思うんだよね。

千坂 年数重ねて思うけど、20代の時って「若さ」が武器なんですよ。いるだけで勝手に子どもたちが寄って来て、話をしてくれる。それは年配の先生にはないですよね。いつまでもそれが続くかって思うとそうじゃない。俺は生徒たちに対してずっと「お兄さん」だと思ってたのが、ある時、

クラスの子どもから卒業文集に「先生はお父さんのようにした」って書かれた時に、俺は兄じゃないのかと。俺はお父さんになってたのかと。自分は変わってないと思っても、やっぱり子どもたちの中では、見方が変わってるわけじゃないですか。武器だった「若さ」がなくなっているわけだから、その時に今度は、どうやってこっちが近づいていくかっていうふうにしないと生徒たちからは話をしてくない。

今、40才になって生徒指導主事とかになると、子どもたちの中で勝手にイメージが作られるわけ。その時に、この先生はそうじゃないんだとか、話せるんだとか、こういう一面もあるんだとかってというのは、子どもから寄って来ると、じゃなくって、こっちから降りていかないとたぶん出会えないんですよ。それで出会えた時に、例えば、家の状況とか、いや実は先生っ、俺、こういう経験してきたんだというような虐待の話や聞いた話、あいつの行動の背景はこうだったみたいなの、子どもの別な姿が見えるじゃないですか。その時にはうれしいうつろい、違う感じ、話で聞けるといいうか、そういうのが、俺の立場から言うと、やりがいだし、喜びになっている。



■一番大切にしたいこと

司会 最後に、今、一番大事にしたいことを一言ずつ言ってもらいましょう。

千坂 新任の時の指導教官の座右の銘があるんですよ。「たかが教師、されど教師」っていう。たかがっていうのは一人の教師に何ができるかと。されどっていうのは、でも俺たちは教師なんだと。

出合いによつて何年か後に何か変わる糧になる種子をまけるんじゃないかって、意味があると思うんですよね。だから苦しくて、たかが教師だから、まあいいやつて思ってしまう時もあるけれども、一方で、されど教師なんだから信念持つて貫かなくちゃいけないところはあるよねっていうことなんだと理解してる。それはやっぱり大切かなって思うね。

佐久間 いっぱいあるんですけど、最近ちょっと感じるのは、若かった時とかは周りに言われてやるとか、それこそ隣り百姓でやってたりしたんだけど、これからは、やっぱり自分がしていることにちゃんと意味を持たせていきたいというか、どうしてそれをやるのかっていうことを自分でちゃんと分かって、子どもに与えていきたいなというふうに思います。そのためにはやっぱり勉強が必要だし、考える時間が必要。あとは、あなたはと思う？ っていうふうに、しゃべる相手の気持ちとかも大事にしていきたいなっていうふうに思いました。

早坂 私は信頼関係ですね。子どもと保護者と同僚との信頼関係。それに尽きますね。そのために自分の心を素直に出

すというのを、今、子どもの前では心がけてます。怒るのもそうだけど、

それだけじゃなくて。この前、読み聞かせしてて、最後までこらえていたんだけど、やっぱり泣いちゃってそんな時、子どもたちから、(ああ、

先生)みたいな。そういう関係が自然に作れたらいいなと思つています。誰とでも素直に心を開いて、向き合つて、信頼関係を築いていきたいというのが一番ですね。

大坂 今でも経験は浅いですけど、初任の頃はもつと子どもに対して本気でがむしゃらだった。忙しさと共にどこかで、(もう、ここはいいや)とか諦めが自分の中でついちゃって、もうこのくらいでいいやつて思いがちなんです。3年目とか前の学校の時とかは、もう体当たりで子どもにぶつかつて、必死だった。つい最近、前の学校で一緒だった先生からメールが来て、3年生で教えた子たちが卒業の時に、卒業文集に私のこと書いてたよって。私は覚えてないんですけど、私が泣いたことも覚えていたみたいで。あの時はもう本気でぶつかつたな、その気持ちを忘れちゃだめだなって、今、思つています。割り切つて考えてたものがあつたところは、それも仕方ないと思うんですけど、やっぱり根底にある、本気でぶつかつて気持ちはずつと持つていなきゃだめだと、初心に返り本気でぶつかなきゃって思つてます。

司会 ありがとうございます。



2016年 新春講演会 (要旨)

生きものとしての人間から、自然と科学を問う

〜生命誌の世界をのぞいてみよう〜

中村桂子



東日本大震災が問いかけてきたこと

今日は、私が日常、生命誌の研究をしながら考えていることをお話したいと思っています。

私の研究の原点は、前からあるのですが、東日本大震災は本当に衝撃でした。まずは地震、津波ですよね。あの時、自然ってなんてすごい力を持つてるんだらう。本当にうちのめされました。私は自然のことをずっと考えてきましたが、ちゃんと自然と向き合ってたんだらうかっていうのが、まず最初の問いでした。

二番目は、原子力発電所の事故が起こったことです。その時、近代科学の粋といわれた科学技術者が「想定外だった」といったんですね。すごいショックでした。自然は人間のことを考えてくれないので、言ってしまうてはいけないんだと思います。その時に、私は今でも忘れられないのは、東北の漁師の方が「海から恩恵をこうむってずっと生きてきた。海を恨んだってしよ

うがない」とおっしゃり、また農家の方がなぜ汚染された田んぼに今もお米を作っているのかを聞かれ、「今年もツバメが来るだらう」とおっしゃっていたことです。もうとにかく自然ときちんと向き合ってる人間の大きさに本当にびっくりして、近代文明って一体何なんだらうって思いました。

科学者が人間であること

そんな中で、私は被災地で何の役に立てるのだらうかと悩みました。私はずっと生きものこのことを考えてきたのですから、やっぱり生きものこのことを、きちんと考えるという、自分の仕事をこのまま地道に続けようという結論になりました。本当にそれしかできないので、そう決めて、その気持ちを書いたのが、『科学者が人間であること』という本です。この本を書いた後、子どもたちのことも考えて、



『いのちのひろがり』という絵本を書きました。

科学者が人間であるということ、それは生活をしてるってことですよ。だから、生活のところから、きちんと考えることをやりましょうということで、この絵本の導入部分を私の台所にいつも出入りするアリスさんの話から始めました。アリスさんを追いかけて外へ出ると、外には、草花から、カエルから、いろんなものがあることに気がつくますね。私たち人間も、その中の生きものの一つとしていてということから、子どもたちへの話を始めています。今は大きくなっていますが、あなたは、もともお母さんのお腹の中で赤ちゃんだったでしょう。ここが一番大事っていったら、語弊がありますが、近代文明は何でも作ってきましたね。だから、日常的に、子どもを作る、お米も作って言いますね。自動車は、作るでいいんですが、子どもって、作れますか。作るという概念の中には、工業製品のように早く作れて絶対完べきなものでなければいけない。そういうものがあります。子どもも、お米も、本当は生きものだから、生まれたり育ったりしているものです。生きもの場合は、時間とプロセスが大事で、作るという言葉で言ったとんに、そのプロセスを消して、時間は短い方がいいように思ってしまう。これが一番大きな問題です。子どもを作るみたいに言ってる社会というのは、そのプロセスを大事にしないということです。

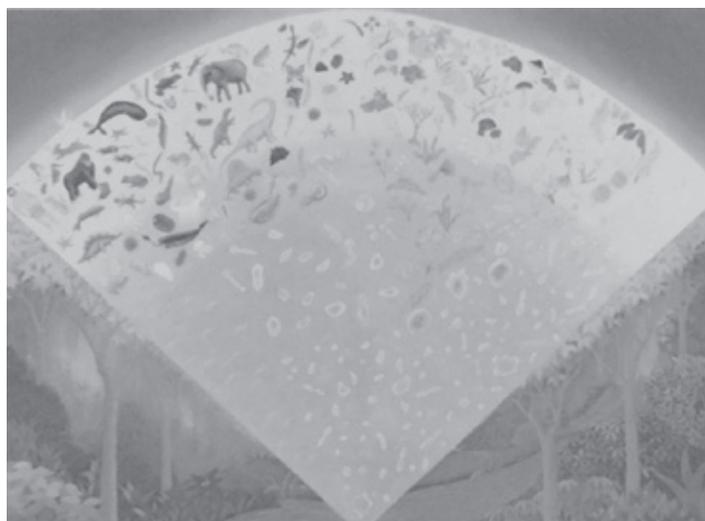
あなたは、お母さんが作ったんではない。お母さんから、生まれてきたんです。お母さんも、おじいちゃんとおばあちゃんがいるから、生まれてきたの。こうして、どんどん戻ると、人間の始まりまで戻ることができるというのが、今のDNAの研究ではつきりと分かります。自信を持って言える結論の一つが、人間の始まりは誰から始めても、アフリカにほぼ20万年前にいたある少数の人間に戻るってことです。だから、人間は争っても本質的に理解し得ないことはないというのが、今の生物

学から言えることです。どこの地域のどんな国の人も、みんな重なる、同じ存在です。これを基盤に考えていきたいというのが、子どもたちに伝えたいことです。

生命誌絵巻に描かれた願い

私たち祖先はホモサピエンスと名付けられています。大昔、700万年から600万年ぐらい前に、チンパンジーと分かれて、人類が生まれましたが、何故か他の人類は全部滅んで、私たちだけが唯一残った人類なのです。その人類がどこから来たかというところ、どどんたどると恐竜に戻り、お魚に戻り、一番最初に生まれた細胞に戻ります。その中で、私たちはどう生きたらいいかを考えたいというのが、私の気持ちです。それを生命誌と名付けました。生命誌(Bihsis)の考え方を、どなたにもわかっていただけるように描いたのが、この生命誌絵巻です。

扇の縁、ここを扇の天といいます。ここにはバクテリア、キノコ、イモリなど、さまざまな生きものを描けるだけ描いてあります。この生物の多様さが、生きものของโลกの一番の基本だということをまず第一に考えたいです。二番目は、この多様な生きものたちのすべてが、DNAが入っている細胞でできていて、あらゆる生きもの祖先は一つだということです。その生命の起源が扇の要のところ。三番目は、コンパスで描いていますので要の根元からの距離が同じで、それが38億年です。どんな小さな生きものも、例えば、バクテリアでも、アリでも



38億年の歴史がある。生きものは、みんな38億年という時間の中で持っているんですね。そして最後にとっても大事なことは、みんな同じ距離ですから、人だけを上に描き、小さな生きものを下に描いてはいません。つまり人も38億年の共通の時間を持った生きものの一つとしてこの絵の中にいるということです。

近代文明というのは、人間はこの絵の外にいますと考えて行動していますね。地球にやさしくって言う時の気持ちは、私、ちよつとえらいんで、やさしくしてやろうと思ってる。絵の外にはいないのに、外にいるような気持ちでやったら、間違いが起きるでしょう。人間は生きもので、自然の一部じゃありませんか。絵の中にある気持ちでやりませんかというのが、私が言いたいことです。

セロ弾きのゴーシュの世界

私は東日本大震災の後に 宮沢賢治を読み直すということをやりました。『セロ弾きのゴーシュ』を読んだとき、あつと思つたんです。ゴーシュは昔の町の映画館の楽団員でセロを弾いてる。めつちやくちや下手くそで叱られてばかり。しょんぼりしてお家へ帰るのですが、その家は森の水車小屋です。前に読んだときは気がつかなくなつたんですが、彼は帰ると必ず「水をごくごくのみました」という描写があるんです。町の映画館は現代社会の象徴で、つらい乾いた世界。森の水車小屋は湿つた、自然に近い世界。水を飲むのは、乾いた社会から自然な世界へ入るための儀式なんじゃないかって。私はこれ勝手な解釈ですよ。賢治が言ってるわけでも何でもない。水を飲むと、そこへ、ネコやカッコウやタヌキなどがやってきて、音程がなつてない、リズムも駄目だねみたいに言うので、むきになつてセロを弾くんです。音楽会の日には、楽団の演奏がすごく良くて、アンコールされます。ゴーシュは楽長に頼まれもう一回舞台に

立つてすごい演奏をするんです。でも、ゴーシュは自分が変わったことに全然、気がついてないんですね。ゴーシュは、乾いた町の世界から森の水車小屋の湿つた世界へ戻つて、そこで命の音をもらい、だんだん変わつていったんじゃないか。いつもと同じに弾いたけれども、森の動物たちと接した後で彼が出した音は、みんなの心を動かした。だから、湿つた世界からもらった音が、乾いた世界の人たちの心も動かしたつていうお話だつたというふうには私は勝手に解釈をしました。そして、これは私がやりたいことだと思つたのです。私は全然何も動かせてなくて、そこは駄目なんです。賢治に励まされて、一昨年、本物のチェリストに参加していただいた『セロ弾きのゴーシュ』の舞台をつくつて、いろんな方に見ていただきました。宮沢賢治は、やっぱりすごい人ですね。今、私たちが考えなければならぬことを、ほとんど先取りして考えている人だつてということが分かりました。

内なる自然が壊れる

大昔は、人と自然とが交じり合つていました。近代文明では、人間が一番えらくなつて、自然から離れて人工的なものを作つて、その中で暮らすようになったのです。私は人工を否定はしません。私の作りたい社会は、人間は自然の一部なんです。それから、それを踏まえた上で、人工を作つていきましょうということなんです。

もう一度、最初の震災のことを考えますと、私たちは今、すごく便利になつて、お金がある国やお金を持つてる人が、素晴らしいという社会をつくつています。人間は自然の一部であることを忘れて、便利さとお金だけを求める社会は自然を破壊します。これが環境問題です。もう一つ、私たちが生きものだということは、私たちの中に自然があるということです。環境問題で、森や海が壊れることはご存知だと思いますが、その同

じ行為が私たちの中の自然を壊さないわけがないんです。私たちの体だったり、心だったり、それが壊される。生きものは時間をかけて、関係を保持している。その時間と関係を切ると、心が壊れます。東日本大震災で私たちが知ったことは、便利さが自然を破壊する。しかもここに科学技術があったために、この破壊が増大されたわけです。こういうことを考えると、利便さだけでなくもの考えるのはやめませんかということですよ。

新生命誌絵巻38億年のいのちのつながり

今のように東日本大震災のことを考えると、実は地球は自然として動いていて、それを考えないで、生きものだけ考えてちゃ駄目だと気がつきました。それで研究所10周年の時に和田誠さんに地球の動きを取り入れた新生命誌絵巻を描いていただきました。この絵巻を見ると地球に氷河時代があつて生きものたちが絶滅していますね。絶滅といつても、一つもないなくなっちゃったら、私たち、いないわけで、こんな厳しい中でも生きものは続いてきたんだから、すごいって思うんです。

例えば、私が研究してるのに、チョウチヨがあります。ナミアゲハというチョウの幼虫はミカン類の葉しか食べません。母チョウがその葉を見分けて正確に産卵するのは前脚に秘密があつて、前脚でトントンと葉を叩き、感覚毛で成分を探ります。人間は舌で味を感じますが、私たちの味蕾みらいという細胞は、実はチョウのこの細胞と同じ構造をしているんですね。生きものは仲間で、38億年前からずっとつながってるんだよっていうことは、こういうことです。もう一つの例は、熱帯雨林に常に実がなつて、動物たちが生きる上で大切なキープラントと呼ばれる木があります。それはイチジクの木ですが、この木の実の中には1.5ミリ程度のイチジクコバチという蜂がいて、子育てをします。2千万年ぐらい前にはイチジクもコバチも一種類でした。2千万年かけて、イチジクもコバチもいろんな種類になつ

て、DNAを分析するとそれぞれがみんな親戚関係なんです。コバチはイチジクの受粉を行い、イチジクがコバチの子育てを手伝う、一対一の関係を共生しながら進化し続けてきたことが、様々な生きものが生きていける大きな熱帯雨林を作ってきたともいえるのですね。

虫愛づる姫君は 私の祖先

私がこんな仕事をしながら、一番大事にしている言葉を最後に聞いてください。「愛づる」といいます。虫愛づる姫君、千年前で、紫式部と同じころ京都にいらつしやつた人です。虫が大好きで、男の子たちを集めさせては、かわいいと可愛がつています。親は「そんなことして駄目、早くお嫁に行きなさい」といい、侍女は「汚ないから捨てなさい」みたいに言っているところです。このお嬢さんは動ぜず、「あなたたち、これがチョウチヨになるときれいつて言うじゃありませんか。でも、それははかない命で、本当に生きてるのはこの虫で、かわいいと思いませんか」つておっしゃるんです。自然の本質が分かっているんです。千年前の日本にこんな女の子がいたんです。私はこの子を大事に大事に思つて、私の祖先と思ひ、やつております。長々とごめんなさい。これで終わりたいと思います。

これは、講演内容の一部を編集要約したものです。内容の責任は文責にあります。なお、講演全体の記録は、教育文化研究センターのブックレットとして発行の予定です。

(文責 千葉)

■最後の曼荼羅の説明が印象に残り、一度、実物を見てみたいと思いました。日曜日朝の「サンデーモーニング」のコメンテーターに時々出演されているコメントをされているということ、年齢よりずっとお若い方だと尊敬もしてきました。今日は直にお話を聞けて本当に幸せでした。Y染色体がだんだん壊れて小さくなっていつている。いずれ将来、滅びるであらうという質問までさせていただきましたが、科学者の立場でのお答えをうかがい納得しました。

■お話を聞き終わったとき、何だか心がほつり、ふんわり、優しい気持ちで満たされたように感じました。もっと自然にふれあいたいなど感じました。質問からお答えいただいた経済のお話もとても納得しました。心が豊かになるお話、ありがとうございます。

■科学技術の進歩で、人が増えていますが、地球的に見てどれだけバランスがとれるのだろうか。今、日本では少子化が問題になっていますが、人間が生き物である限り極端に減少することは無いと思っています。放射能に不安を感じるのは人間だけです。他の生き物たちは、そこへ侵入してたくましく生きています。人というものが、なんと不自由な生き物かと思えます。生命誌研究館へいつかは行ってみたいと思っています。

■とてもよかったです。女性で、学者で、真理が分かった上でのどうすべきかですので、説得力がありました。経済は人のためにある。そうですね。永田町の方にも聞いて欲しい内容です。

■とても面白かったです。人間も他の生きもの一つであり、35億年のつながりがあるというのが、とても心に残りました。人間が地球を支配しているような考えにとらわれている人が多いと思います。科学・技術・文化が、すべての生きものの命を大切にすることを考えて発展するのなら、どんなにすばらしいかと思えます。いろんなことを考えさせられました。昨年の夏、プランターで育てたキュウリの葉にチヨウが卵を産み付けて、取り除くの忙しかったのですが、これからは少し大目にもみようかと思いました。

■38億年という時間・空間と結びついた話ごとつてもわかりやすい。宮沢賢治の新しい発見はなるほどと思い、「セロ弾きのゴーシュ」を愛する方だと思ひ、この賢治と中村さんとの出会いの話ももっと聞きたいと思ひました。

■映画「水と風と生きものと」を観てたので、中村さんから予想以上の深い話を聞くことができ、映画作りに集まった人の気持ちが変わる気がしました。

■いのちの大切さを身体の奥の方で確かめることができました。とてもいい講演でした。とても大きな勇気ももらいました。

■娘のところに、なかなか子どもができません。早くつくついたらというのが、私の正直な気持ちでした。でも、子どもはつくるのではなく、生まれるのだというお話を衝撃を受けました。やはり思い上がりの強い人間だったことに気がつきました。

■利便性や経済性のみが追求され、それに踊ら

されている現代。人間らしい営みが否定され、失敗やロスが最悪の事柄のように突きつけられ、常に臆病でストレスを抱えている大人と子ども。時間がかかって当たり前。うまくいかなくて当たり前。ゆっくりゆっくり、どきどきしながら、わくわくしながら育つ過程を大切にしたいと思う。そんな教育であって欲しいと思う。学校は社会の縮図で、子どもも教員も成果主義。でもファストエデュケーションなんてありえないのだから、子ども達を自然に触れさせ（教員も自然に触れ楽しまない）楽しい学習をつくらないと。新春にふさわしい講演でした。（水田や畑が広がる学区なのに、虫が嫌いでバッタにもハエにも大騒ぎして逃げ回る子ども達を担任している教員です。

■とてもたくさんのお話を聞かされたお話でした。基本的な思想（何をどう考えているか）を聞き、自分の仕事をとらえ直すことができました。喜多方の小学校の実践、人工と自然の対比、38億年の生命の旅、経済と生命の価値関係など、良かったです。

■中村先生に初めて会ったのはTVでした。それ以来、一度お目にかかり講義を受けてみたいと思うようになり、およそ30年を経て今回の機会に恵まれました。

■確か、NHKのシリーズで放送していた番組だったと思うのですが、生命の誕生は1つの卵子と何億の中の一つの精子が結びついて生まれるもの。精子が卵子までたどりつく過程がとても大事。その過程を省くことはよくない。危険なのだと話されていたこと

を覚えていきます。ちょうどその頃、人工授精や体外受精の卵子を摂取する場面もありました。何か違和感を覚えたものです。摂取した卵子を他の研究に使っていいですかという承諾書をとっているのです。どんなことに使われているのだろうと思ったものです。今日は久しぶりに生命の研究の根本・基本を学び直した気がします。ありがとございました。

■今、生きていることの素晴らしさ・不思議さを改めて思いました。元をたどれば同じ祖先から続いていることや、虫も雑草と言われている植物もヒトも、地球の中で共に生きているという意識が世界中で共有できれば、違いを超えられるかもしれないと、希望がもてるお話でした。

■土に触れて子どもが育つことが当たり前、子どもは失敗をしながら育つもの、手をかけなければならぬもの、思い通りにならないもの、という大人の視点がとても大切だと思いました。ぜひ子育てをしている若い人たちが保育士・教師たちにも聞いてもらいたいと思いました。

■生命科学の視点から社会を読み解く試みは新鮮でした。生命に対する考え方をどのように学び、現在にどう位置づけられるべきかを考えさせられました。

■被災者の一人として、絶望の中で生きる人たちのつながりをつくろうと生きています。

■自然と人間社会の関係を考えているという姿勢がとても大切だと思います。「想定外」という言葉はもつてのほか。同

感です。人工的環境過多の東京から、仙台の隣の小さな町に越えてきて、自然の中で暮らしていると、人間より自然の方が大きいことを実感しています。9日に出会った3・11後にできた仙台の羅須地人協会や、10日に見た沖繩の映画の辺野古の住民・漁民たちの気持ちに共感しています。

■生命を感じて生きていくことの大切さ、生命のつながりを語ることの大切さ。学校に少しでもそのような時間をつくっていただきたいです。

■生きものは多様で、生きものはプロセスが大。事。あらゆる生物の祖先はひとつ……など、学校教育で子ども達と真剣に話し合うことができれば、いのちの大切さがよくわかると思います。

■自然の破壊が、いわゆる自然環境を壊すだけではなく、人間という自然をも破壊してしまうという話が印象的でした。これからのいろいろな場面で考え続けなければならない深い内容をもちたものだと思います。

読みきかせにおすすめの本

<低学年向き> ~~~~~

『**ふまんが**あります』ヨシタケシンスケ作 PHP 研究所
子どもと大人の付き合いにはユーモアが必要！読み手の心も耕す絵本。



<中学年向き> ~~~~~

『**いのちをいただく**』内田美智子作／諸江和美イラスト
西日本新聞社
数年前、岩沼市のPTAのお母さんから紹介された本です。「授業参観の時しのぶ君はお父さんの仕事をまともに言えなかった。」食肉加工センターに勤める父と息子の心の葛藤を描いて、いのちの大切さを深く考えさせられる。絵本も出ているが、この本のイラストのほうが内容にふさわしい。



『**6わのからす**』レオ・レオーニ作／谷川俊太郎訳
あすなろ書房
農夫とからすの麦をめぐっての争いはどうなったか。戦争をしたがる人に読んでほしい。



(紙芝居) 『**のぼら**』原作・小川未明 / 脚本・堀尾青史
絵・桜井誠 童心社
学校でも是非紙芝居を活用してほしい。静かに深く平和を願う作品。



<高学年向き> ~~~~~

『**ヤクバーブとライオン、<I> 勇気**』
『**ヤクバーブとライオン<II> 信頼**』
ティエリー・デデュー作 / 柳田邦男訳 講談社
真の勇気とは何かを重く考えさせられる。



(のぞみ文庫 川端英子)



堀籠 拓



新しい春を迎える前に思うこと

■「学力向上」策の中での 図工・美術教育

小学校高学年で図工の時間が削られて以来、じっくりと時間をかけた作品の制作が難しくなっている。教科書には、2〜4時間で終えられる題材（それでさえも丁寧に仕上げようとするばオーバーしてしまう）ばかりが並ぶ。木版画の配当時間に至っては、なんと8時間。これでもまだ良心的な方で、別の教科書会社の指導計画には、「配当時間6時間・予めいろいろな版画の方法を理解させておくとともに、それぞれに必要な用具を用意しておく」とよい。これまでに経験していない彫り進み版画、ステンシル版画、一版多色版画については、教科書P68を参照させる。スキヤナでパソコンに取り込んだ画像を加工した作品やコピーを利用した作品も、『写す』という広い意味で版画にとらえない。スキヤナを使う方法は、教科書P68を参照させる」との驚くべき記載がある。ここには、版画という文化を継承しようとする観点は全く見られないし、「子どもが対象とじっくり関わり、教師がそれを見守り援助する」「自分の作品に愛着をもち、作品の鑑賞を通じて子ども同士が交流を深め、広げる」という、ゆったりとした時の流れを感じることもできない。

ここ数年、国語と算数に特化した校内研究が多くの学校で行われている。私が新任だったころは、国語、算数はもとより、社

会や体育、音楽、図工、特別活動など、様々な教科・領域で研究が行われていた。もちろん深い専門的な学びの場は、民教研や組合教研であったが、校内研究という半強制的とも言える「学び」の中で、指導するのに必要な最低限の基礎・基本だけは身に付けることができた。

■ 二つの実践から気づいたこと

○35枚の自画像「12歳の自分」

教師になつて5年目、石巻市立開北小学校で初めて6年生35人を担任する。当時、開北小学校は、図工で校内研究を行っていた。現在、多くの学校で取り組まれている「スキルタイム」や「朝読書」のように、「クロックキータイム」という朝の活動があった。週1回10分程度、自分の手やランドセル、上履き、友達の後ろ姿などを集中してスケッチするというもので、描き終ってなくても時間が来たら終了という、意外に気楽な取り組みであった。

卒業が迫ってきた3学期に自画像に取り組む。「12歳の今を絵に表そう。今の自分と向き合うと過去の自分や未来の自分に出会えるかもしれない」そんな言葉を投げかけて取り組んだように思う。鏡に映った自分の顔と向き合いながら子ども達は、小学校生活での思い出を振り返り、これからのことを考えていたのかもしれない。作品からは、卒業を前に真剣に自分と向き合う35人の姿が見えてくる。

「見るから描ける、描くから見えてくる」のである。

○木版画「だいくとおにろく」

6年生を卒業させた後、3・4年と持ち上がる。「ギヤングエイジ」という言葉通りの、明るく、活発で、何でもやりたがる素敵な子ども達だった。

その年は、図工の研究を終え、社会で校内研究に取り組んでいた。地域教材で北上川の渡し船の船頭をしていた方に話を聞き、開北橋がかかった時の様子を取材し、学習発表会で「だいくとおにろく」のオペレッタに取り組む。これは、学習発表会の後に取り組んだ木版画作品である。

木版画初挑戦の4年生。やりたがり屋の子ども達は、新品の彫刻刀を持ちワクワクしていた。今思い返してみても「よく取り組んだものだ」と思うが、「大変だった」という印象は全くない。1年生から3年生まで、図工の校内研究で「鍛えられた」子ども達は、下絵を描くことにはそれほど苦労しなかったと記憶している。社会科の学習や学習発表会での取り組みを通じて、「だいくとおにろく」の世界にどっぷりと浸かっていたことも大きかった。子ども達は、新しい彫刻刀を手に、「コリコリコリコリ」という音と感触を楽しみながら彫り進め、作品の刷り上がりを楽しんでいた。「本物を知らなければ、想像で描きたくても描けない。本物と向き合った経験がなければ、イマジ

ネーションの素材を蓄積することはできない」（サイエンスウィンドウ）

やはり、「見るから描ける、描くから見えてくる」のである。

■「見るから描ける 描くから見えてくる」

このフレーズは、各校の理科主任宛に送られてくる「サイエンスウィンドウ」（独立行政法人科学技術振興機構2013春号）の特集名である。以下、特集の巻頭言を紹介する。

子どもと一緒に絵を描いてみよう／「上手に描けなくてもいいから」と言って、

芸術家の中には、／あのピカソみたいに／似てない絵を描く人がある。／描いてみたら、／本当にあのような世界が／見えてくるのかもしれない。

描くことは、／よく見ることで、／よく想像すること、／そして分かること。

昔、美術と科学は同じものだったという。／今の人も昔の人も／なぜ描こうとするのだろうか。／それは、きつと／今まで見えなかったものを見たいから。

子どもも大人も、／描き出す力を膨らませよう。／美術の世界を科学で探ってみた。

大変興味深い内容である。一読

をお薦めする。

■もつともつと描かせよう

今回、センター通信への原稿依頼を受け、これまで漠然と抱いていた疑問（課題）に向き合うことができた。二十数年前の子ども達の作品は、私を、作品が生まれた当時のあの場所に引き戻してくれた。しっかりと見て描いた作品は、描くという営みの全てを映し出してくれる。

「もつともつと描かせよう」これが、新しい春を迎える前に導き出した結論である。

（古川第二小学校）



《子ども》の 年齢と法律

花島 伸行

れ、児童虐待の防止等に関する法律（平成十二年）も同様、日本も一九九四年に批准している児童の権利に関する条約（子どもの権利条約）にいう「児童も18歳未満のすべての者を対象としている。

ところで、何歳になるとどんなことができるようになるかについて、法律はこれまで様々なラインを設定している。「年齢二十歳をもって、成年とする。」と規定しているのは民法

「子ども」とは何歳までを指す言葉か。個々の法律において「子ども」の定義、線引きの仕方は様々である。法律によって、その立法趣旨も異なるからである。子どもの読書活動の推進に関する法律（平成十三年）では、「おおむね十八歳以下の者」とフアジーな線引き。子ども・子育て支援法（平成二十四年）では、「十八歳に達する日以後の最初の三月三十一日までの間にある者」、つまり、高校卒業相当の時期までとしており、児童手当法（昭和四十六年）の「児童」もこれと同じである。ちなみに、子どもへの支援における国の責務等を定めた子ども・若者育成支援推進法（平成二十一年）には、「子ども」

の定義規定自体が置かれてない。そもそも法律の条文に「子ども」という言葉が使われるようになったのは比較的最近のことであり、それまでは専ら「児童」の語が使われてきた。児童福祉法（昭和二十二年）にいう「児童」は「十八歳に満たない者」とき

めていた。しかし、昨年（平成二十七年）の法改正によって「年齢満十八年以上の者」に選挙権年齢が引き下げられた（施行日は平成二十八年六月十九日）。民法の「成年」年齢は二十歳のままなのである。これで、

憲法改正に必要な国民投票の投票権も「年齢満十八年以上の者」に認めることが確定した（日本国憲法の改正手続に関する法律）。

以上を前提に、目下考えねばならないのは、①満十八歳の高校在学者が政治活動等を行うことを制限できるか、②民法の「成年」年齢も十八歳に引き下げるべきか、③少年法の適用年齢についてはどうか、といった問題である。

①は、有権者としての自由な政治活動と、政治的中立性が求められる学校という場の特性を、どう調和させるかという問題である。宮城県・仙台市では、校外での政治活動等について事前の許可や届出を不要とする指針をまとめたとのことであり、生徒の自主的判断に委ねる方向性は適切であろう。

②の「成年」年齢については、すでに法制審議会が引き下げを適当とする答申を行っていた（平成二十一年）ものの、世論では未成年者保護の観点からの反対論も根強い中、昨年、選挙権年齢を引き下げる法改正が先行したため、民法の「成年」年齢問題もあらためて注目を集めてい

る。選挙権年齢を十八歳で認めるのだから、市民社会において「成年」扱いして何が悪いのか、と短絡しては困る。たまに行われる国政選挙に今までより二年早く行けたくらいで、これまで十八歳・十九歳の若者が受けられていた保護の水準も下げる、という議論は、価値的にまったく釣り合っていない。現代の若者は総じて成熟に時間を要する。よって、「成年」年齢の引き下げには反対である。

③の少年法では、「少年」とは「二十歳に満たない者」をいい、「成人」とは「満二十歳以上の者」をいう。少年法は、保護主義の理念に基づき、罪を犯した非行「少年」を「成人」と区別し、できるだけ刑罰によらず保護的・教育的措置によって健全に育成することを目的とする。少年法の適用年齢を引き下げれば、十八歳・十九歳の若者を保護・教育の機会から締め出すことになるが、これまた、選挙権年齢の引き下げと連動して考える根拠に欠けている。「二十歳に満たない」のに罪を犯してしまう人の多くは、成長発達の機会が十分に保障されない劣悪な環境を生き抜いてきた若者であることからすれば、十八歳で選挙に行けても行けなくても、保護・教育による立ち直りを支援すべき必要性には何ら変わりがない。少年法適用年齢引き下げ論にも与することができない所以である。

金の卵の私は学生であつた期間が短い為、狭義的な意味においては先生とは縁が少なく、記憶にあるのは口くでもない負の思い出ばかり……。特に小学校5・6年の時の担任など、最悪でした。その名も、「S・M」センセイ……。 (単なるイニシヤルであり、彼の性癖とは何ら関係ないものと思われます)

あるとき彼は、自習中に騒いでいたクラスの半数近くを黒板の前に整列させ、女子は定規で、男子は平手で、一人ずつ引つ叩いていきました。普段から目を付けられていた奴なんかは、斜めにシングルアクセルしながら吹き飛ばされてしまった程でした。このとき私は具合が悪かったのか、奇跡的にチヨドシテいたので難を逃れましたが、眼前で行われた公開処刑には色々と考えさせられました。

また、あれは林間学校の宿だったか。彼は風呂上がりの生徒を一人ひとり脱衣場の足拭きマットの上に立たせ、きちんと体を拭いているか確かめるという名目で陰部を隠す手をどかし、私達を辱めました。私はこの、プライベートゾーンのプロ字も知らないゲスの極み教員の奇行のお陰で、軍隊などの縦社会にはびこる権力の悪用にヘドが出る体質の素地が形成されました……。

そんな反面教師のお陰もあつて、本物の先生を見付けるのはとても容易でした。怒ると叱るの分別がつかない者や、指導ではなく自分の考えに従わせようと「私導」する者を、避ければいいのですから。

私は今、とある国語の先生の元で詩を綴っています。ちよつとお茶目な小田実さんといった風貌のその先生は、傘寿を迎えて尚ご自分の言葉に慢心せ

わたしの出会った先生 13

薫陶を受けし塾生より

つじりよう



15年の長きにわたるご指導の中で薦められた書物はほんの数冊で、実際にお貸し下さった本に至っては、たったの1冊だけでした。そんな長閑で広大な牧場に放牧されなければ育まれないものも在り、私はそこで良質の言の葉で出来た牧草をのんびり食むことが出来、反芻することが許されました。これは、識字は出来ても読字に難のある私にとって、非常に重要な時間でした。

私たちは、色々な「顔」をたくさん見せてくれました。

先生の中にはある一人の少女が居て、今でも時折、心の中で屹立しては困らせるのだとか。詳細はよく分からないのですが、彼女は先生が新米教師の頃に受け持った生徒のようで、何かについて「本当にそれで良いのですか先生？」と言わんばかりに、眼光鋭く睨み据えているらしいのです。(いいぞ少女、その調子だ、私はそんな遅しい彼女の陰に隠れて、アニメ「団地ともお」の主人公の様に、「そうだそうだ!」と事ある毎に先生を詰るのでした……。

そんなオダツモツコの私は以前、完全にぶつ壊れて嗚咽しながら先生に電話した際に、「あんたあー、優しいから大丈夫だあー」と、しなやかに救って頂いたことがあります。あの時はどうしようもなく厭世的で理性を遙かに凌駕していたので、本当に助かりました。未だ時候の挨拶も出来ず雪月花も詠めない私ですが、私も先生のように奥ゆかしい言葉たちを紡げるよう励みたいと思います。

塾長、今後とも柔らかくご指導と穏やかくなご鞭撻の程、宜しくお願致します。大還暦の、その日まで。

(詩人)

ずに、膨大な語彙たちと常に慎重に向き合い続けて居られます。肩書きやお立場が有るのにもかわらず、決して驕らず押し付けけない在り方に強く感銘を受けた私は、勝手に先生の詩の私塾を作り、酒宴の席で程好く酌酩状態になられた所を見計らつて師事しました。すると先生は、学のない私のことをモゾコク思つたのか事態があまり呑み込めていないのか、とてもご機嫌なご様子のまま、たつたので、晴れて塾長に就任して頂くことと相成りました。

先生は見守るのがとてもお上手で、詩でしか自分の気持ちを表せなかつた私を、咎めることは一度もありませんでした。そのお陰で、アダルトサヴァイヴァーの私はようやく私を見付け、少しずつ自分に近付いている様に思います。私はこの「求めない」という姿勢を、フリースクールにおいて催す詩のワークショップで常に心に留め置き、子どもたちと接してきました。それが奏功し、綴られた文字の中に子ども

一昨年四月から、みやぎ教育相談センターで週二日、相談員としていろいろな方々のお話を伺ってきました。相談内容は、日常の家庭生活での困りごとのようなお話から、深刻な悩みまで多岐にわたっていて、背景となつている世の中についても考えながら、一人一人の方の悩みと向き合う日々です。以下、一年を振り返って感じていることについて述べて、みなさんと考えていきたいと思えます。

障がいのある

お子さんたちから学ぶ

昨夏、教育のつどいの全国大会が仙台で開催され、私たち相談センターの相談員は「登校拒否、不登校の克服」の分科会をお手伝いしながら参加しました。教職員、研究者、学生、保護者など多くの方の参加があり、たくさんのレポートが興味深く勉強になりました。ただ、何かもやもやした疑問がしばらく胸の中に残っていたのです。それは、相談センターでも時々感じる思いです。学校を休みがちで教室に行けない生徒が保健室を居場所とすることを学校が制限する現状が話題となりました。保健室利用で落ち着きを保つ必要のあるお子さんが「怠けている」と許されず、校内でも理解が得られないというのです。センターでの相談事例のいくつかでも、サポートする側の先生や学校の環境がその子の「障害」になる例や、

自己肯定感を育むはずの学校で「自分だめな人間」と自信を失っている例があります。そのたびに悔しく残念な気持ちになつていきます。「明日が待ち遠しく思える学校はどこへ」「なぜ一人一人の子どもが大切にされないのか」という思いです。

私にとつて、すべての命を大切に輝かせるという究極の価値、どの子どもも大きな可能性を持つていけるといふ発達観を培つてくれたのが障がいのある子どもたちでした。教員生活のほとんどを養護学校（支援学校）に勤務し、障がいのあるお子さんたちと接してきた私の障害児学校（スタート）は養護学校義務制が始まった一九七九年です。それまで就学猶予・免除という制度で在宅となつていた重度の子どもたちが、長い運動の末に権利が認められ入学を果たした忘れられない年でした。子どもたちはスクールバスからここにこして降りてきて一日の活動が始まり、活動を終えて「また明日」と帰ります。わが子に障がいがあることがわかり、不安なつらい気持ちを抱えてきた保護者の方たちは希望を持って学校に送り出してくれました。身支度を整え、食事を手伝い、中には登校時間に合わせて経管栄養をしていただいている子どももいました。保護者の方の協力があつて成り立つていく大切な時間、せっかく学校に来てくれた子どもたちに学ぶ楽しさ、わかる喜びを味わってもらいたい、学校生活で豊か

な経験をしてもらいたいと教師間でアイデアを出し合い話し合いを重ね、教材教具を工夫する日々。例えば、酸素ボンベが常時離せないお子さんに細心の安全管理を行いながら、楽しめる遊びにどのように参加させたらよいか考える……、例えば、不安が強く集団に入れない子には、個別の活動を保障し、グループの大きさや活動時間の配慮をする、ヘッドフォンをつけて音を遮断する……、あたりまえですが、一人一人の状態に合わせて工夫をしなければ学習活動は成り立ちません。

分かり合うには

知的な遅れのない「発達障がい」を含めた一人一人のニーズに応じた「特別支援教育」がすべての学校で始まってから、支援学校は地域の先生方や保護者の方々に向けて研修を公開する試みを行ってきました。テーマとしては障がいの理解、特に発達障がいの理解は何度も取り上げてきました。支援の第一歩は理解です。環境が整っていないために活動が制限されてしまう、無理解な人的環境では社会参加できない状況が生まれてしまいます。環境調整ということがとても大切になることを机上の知識だけではなく、支援学校の施設や教材を活用したキャップハンディ体験研修などから学びました。さらに外部講師をお願いして発達障がいの疑似体験プログラムを学んだこともあ

ります。自分ももし障がいのある人の立場ならどのように感じるかを体験しながら想像力を鍛えるものです。このような研修をとおして、同じ教室にいる子どもたちの学び方がみんな同じではないことを学び、どの子も学びやすい環境を考えます。目の見えない方にはどんなサポートが必要か、足の不自由な方には「車いす」という支援やどんな社会の環境が必要か考えるのと同じように、次の活動の見通しが持てなくて不安になったり、教室のいろいろな刺激で集中できなくなったりしてつらい人たちの気持ちを理解し、どんな支援が必要か考えるといったものです。理解の一助になつていたでしょうか。

教師として未熟だったときには泣き叫んだり教室を飛び出したりする子どもの不安やつらさをわかってあげられなかったこともありましたが、子どもたちとの活動から学び、さらに高等部ができ、言葉にできる自閉症の生徒と出会い、その苦しさを生徒たちからも学びました。お子さんの笑顔を引き出そうと仲間と努力し、一人一人の良さを見つけて社会へ送り出す尊い仕事にかかわらせていただいたこと、保護者の方たち、同僚から人として大切なことは何かを学んできた日々にあらためて感謝の気持ちが湧いています。

理解がまだまだ進んでいない現状にたびたび悔しい思いしていますが、それ

でも「障がいや生活上の困難のある人もない人も違いを認め合い共に豊かに生きる社会の実現」という理想の道の途中ととらえたいと思います。知的障がいや身体障がいの重いお子さんが学校で学べるようになってから三七年、「特別支援教育」の始まりから九年、「あたりまえ」のことなのに教育の長い歴史のなかではまだ日の浅い分野なのかもしれません。

前述の全国大会では救いとなる事例がありました。小学校から不登校になった娘さんが「発達障がい」と診断され、親子で揺れながらも、理解してくれる人たちに支えられ、障がいを受け入れ、支援学級を「利用して」自分らしい学びができたという報告です。現在は、娘さん自身が選んだ大学で学び、その先の大学院をめざしているとのことでした。当事者として娘さん本人が「苦手なところも含めて自分は自分」と語ってくれました。

今、相談センターでは大人になつて苦しさを言葉にしてくださる方々と出会っています。自分自身の「障がい」について悩む方の相談もあります。診断を受けたこと、手帳を持つことで自分を認めたくないと感じている方もいます。私は「障がい者手帳」はレッテルを貼るものではなく、苦手なところへの援助を受けやすくする道具ととらえ、上手に活用でき

ればと思つています。決してその人らしい生き方を制限するものではないと思うのです。診断を受けたとしても、同じ診断名でも人それぞれ長所があり、苦手なところは違えます。障がいがあるか否かが問題ではなく、誰にでも苦手なところはあるのですから、そのニーズに応じて援助を受けながら、自分らしく生きていけることが大事なのではないかと思つています。自分自身の好きなこと、よいところに気づくお手伝いをしていけるような相談を心掛けています。

最後に

新聞を開けば、子どもや高齢者への虐待、いじめ……、胸が痛くなるニュースばかりです。想像力を鍛え、相手の立場に立つて、人の痛みや喜びに共感できる心を大人にも子どもにも育てていかなければなりません。「子ども・父母・市民のために」「誰でもが安心して相談できて、誰でもが大事にされる相談センターをめざそう」という設立の原点を大切に、私たちは、相談者の秘密は守りつつ、苦しみながら発信してくれたことを伝えていく役割があると思つています。子どもの健やかな成長を願い、微力ながら、出会った方の幸せのお役に立てればと思つています。



おすすめ映画

2月の映画あれこれ

忙しい時ほど映画を見たり、本を読んだりしたくなる時がある。2月に見た4本を順に紹介してみる。

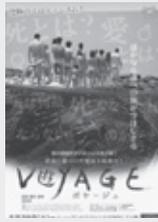
「みんなのための資本論」クリントン大統領政権下で労働長官を務めた経済学者ロバート・ライシュ出演のドキュメンタリー。原題は「Inequality for All」。邦題は訳した人のセンスか？ 格差そのものが問題なのではなく、その格差がいつ顕在化するかが問題なのだ。と。アメリカの後の追いかける日本？ しかも、主人の要望を、強制されずとも慮り行動する奴隷のごとく、空気を読み動く傾向の強い日本人としては何とも言えない危うさ一杯。でも、知ること、考えること、そして行動することは何より重要なのだと思わされる。

「Voyage」どんな映画？ と聞かれたら、ある視点から言えば、若い青年の裸が次々と出てくる映画。別な視点から言えば、人生と旅と生と死、そして若さの映画。好き嫌いは別として、妙に心にひっかかる映画がある。自分が何に引っかかるのかを考えるのも面白い。私にとってこれはそんな映画の一本のようだ。

「踊る旅人・能楽師津村禮次郎の肖像」伝統芸能、その身体の使い方には力がある。芸能に限らず時の洗礼を受けて残っているものには人を感動させる何かがある。そして、そのうえに新しい挑戦があり、またそれが人を惹きつける。身体的なことには理屈抜きに魅かれる何かがある。ましてやそれが、自分よりだいたい年上の人だったりすると、人の体というものは手入れと訓練次第で結構使えるものなのだろうか、と錯覚してしまう。

「Seasons」チラシや、予告から想像していたものと実際に見た感じが大分違った映画。どうやって撮影したのだろうと思う映像がたくさんあった。そんな中で一番驚いたのは狼の顔の豹変。歯をむき出した時の残忍そうな（というのとは人間の勝手な思い込みだろうけれど）。何とも恐ろしい顔つきといったら、ギーガーのエイリアンなどはこんなところからも影響されているのではと思わせられた。

(宮原淳子・仙台商業高等学校)



センターの動き

1月

- 5日 仕事始め、民教連・冬の学習会でセンター担当の講座を行う。
- 6日 民教連冬の学習会2日目。午前中、社会科の分科会に参加。あすと長町の仮設住宅でのコミュニケーションづくりの話を、元自治会長の飯塚さんから聞く。
- 8日 新春講演会準備。書籍が届かず出版社に連絡する。
- 11日 中村桂子さんの新春講演会に100名以上参加で満席に。内容も新鮮でとてもよい会になる。
- 15日 年明け最初の事務局会議。冬の学習会、中村桂子さん講演会などを報告・話し合う。また今後の震災を考えるつどい、つうしん82号の内容について議論。
- 18日 ゼミナール study。今回は啓蒙期の教育思想、具体にはスピノザ、デイドロ、エルヴェシウス、コンドルセを扱う。
- 21日 向洋中学校の瀬成田さんの総合学習(防災・震災教育)を参観。子どもたちの聞き取り調査の発表会を聞く。
- 26日 午前「仙台の子どもと教育をともに考える市民の会」事務局会議。「みやぎ教育のつどい」事務局、講演講師を誰にするかを中心に来年度の取り

組みについて話し合う。

想について話し合う。

- 27日 武庫川大の上田さん来室、一緒に向洋中学校の総合学習を参観。2回目となる生徒たちの聞き取り調査発表を聞く。子どもと授業を考える会、内容も「定ちゃんの手紙」「かさこじぞう」を扱い、話し合う。
- 28日 社会科教科書問題検討委員会に出席。
- 29日 フォーラム座談会。午後、春日さんつうしん別冊を含め次号の編集について話し合う。
- 30日 「教育」を読む会。山崎隆夫さんの「子どもが授業の中で夢を生きているとき」を読み合う。
- 31日 道徳と教育研究会。戦争期日本の道徳意識と、現職教師の道徳観・道徳教育観について報告、話し合う。
- (2月)
- 12日 事務局会議。中森さんから大川小問題を学校論として取り扱う必要があるのではと提起を受ける。
- 13日 82号つうしんの座談会を行う。
- 15日 センターホームページ1日のダイアリーアクセス数、過去最高の33名に。
- 16日 つうしん原稿。早々と川端さんから届く。
- 17日 映画「かすかな光へ」(太田堯)の上映実行委員だった、東北大4年生が卒業前に挨拶に来る。夜、子どもと授業を考える会「えんぴつびな」の授業構成
- 22日 フォーラムで話題提供をしてくれた東北大4年生が来室、この春からは宮城で教師として働くとのこと。年度末の運営委員会案内を発送する。
- 23日 仙台の子どもと教育をともに考える市民の会。年末に予定の設立15周年記念の講演講師の人選など話し合う。
- 25日 川前小学校S先生の「かさこじぞう」の授業を参観。能力・発達サークルのメンバーと授業について話し合いを持つ。
- 27日 「教育」を読む会。午後は、宮教組・民主教育をすすめる宮城の会と共催の「3・11を考えるつどい」。
- (3月)
- 6日 依頼していた通信原稿。全部集まる。特集・座談会の記録を整理。
- 7日 「主権者教育を考える3・7市民集会」に出席。
- 11日 事務局会議。25日開催予定の運営委員会の議題内容について話し合いをする。
- 14日 ゼミナール study。ジョン・ロックの教育思想を扱う。
- 15日 武庫川大の田中さん来室。今後の被災地聞き取りのことなど話し合う。
- 20日 道徳と教育研究会
- 21日 教科書問題を考える県民のつどい。「教育」を読む会。
- 25日 第2回運営委員会

(菅井)